**【セッション③】「パラスポーツという希望」**

モデレーター：田中　晃（協議会評理事／株式会社WOWOW 代表取締役社長執行役員／一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟 会長（代表理事））

パネリスト：河合　純一（協議会評議員/日本パラリンピック委員会 委員長）

瀬立　モニカ（パラマウントベッド株式会社所属/2023 年度パラカヌー日本代表）

田中　それでは早速、２０２１年の東京パラリンピックを振り返りたいと思います。無観客だったのは寂しいことでしたが、パラスポーツ界にとって歴史的な転機となりました。河合さん、パラスポーツの強化・普及の観点から、東京への招致が決まって以降のパラスポーツ界の変化について、ポジティブな面と、逆に明らかになった課題についてお話しください。

河合　ポジティブな面は、東京を目指そうと思う若者、障がいのある方々が、夢や希望を持ってチャレンジする機会になったことです。さらに、ジャパン・ライジング・スター・プロジェクトというタレント発掘の事業で選ばれた選手から東京大会で４名が参加しましたし、東京後も２０２３年１０月に行われたアジアパラ大会では１８名が参加するなど、着実に実績を残しています。何よりも、リオでは金メダルゼロでしたが、東京では金メダル１３を含む５１個のメダルを獲得したこと、さらには２２の競技種目全てに日本代表を出場させることができたのも大きな成果でした。一方、課題としては、オリンピック・パラリンピックで応援してくれた企業や個人が、大会が終わると「じゃあ、お疲れ」と去っていくようなケースもあったことです。共生社会をつくっていくために、引き続き関係を継続したいとおっしゃっていただけるところと、大きな差が出たと思います。

田中　モニカさん、パラスポーツ界を取り囲む環境について、アスリートの立場からどんな変化があったかを教えてください。

瀬立　私は東京の江東区出身で、東京パラリンピックが決まって、地元の江東区からパラカヌー選手を輩出しようという事業に乗って、ここまで来ました。江東区が練習場所の提供、船の寄贈、指導者・コーチの派遣など、スポーツを始めたいと思ったときにハードルとなる部分を、自治体レベルがバックアップしてくださるという環境を得られました。東京大会に向けて、すばらしい練習環境を提供していただき、その後も事業は引き続き継続して残っています。

田中　競技の強化とか練習環境では、本当にポジティブな面が増えているわけですね。東京パラリンピックは「多様性と調和」をスローガンに、共生社会の実現を目標に掲げていたと思います。東京大会を経て、日本は、障害を持った方やあるいはマイノリティーの方に対して、生きやすい、生活しやすい国になったと思いますか。河合さんからお願いします。

河合　私は今、３０～４０分かけて電車で通勤していますが、通勤時間を含めて、声をかけていただく機会は以前よりも確かに増えてきています。明らかに東京のオリ・パラは教育や啓発をする機会を増やした意味で大きな影響があったと思います。今はホームドア、点字ブ

ロック、エレベーターが当たり前の設備になっていますが、最近はプラレールとかのおもちゃにも、駅にホームドアとか点字ブロックがついているそうです。そうやって子供たちの環境も変えていこうということも含めて、社会の変化を生み出す力になったと思います。
田中　現実のレベルで、もっと実は期待していたんだとか、そういうことはないですか。
河合　昨日も歩いていたら、白杖を踏まれて折れてしまいました。（踏んだ人は）一言も謝らずに通り過ぎられたので、何か言ってくれてもという気持ちはありますよ。とはいえ、全体としては声をかけていただくことも増えているので、一部のネガティブな反応を引きずって生きないようにしようと、気持ちを切り替えていますけどね。
田中　モニカさん、どうですか。
瀬立　東京が決まった直後は、世間は「障害を持った人たちがスポーツを頑張っている」と見ていたのが、東京以降は、感動や勇気をアスリートが与えているというような見方になってきたように思います。
河合　レガシーというのは、始まる前からどうしたらレガシーが残るかを考えて取り組むものだと思います。２０２４年５月に開催されるパラ陸上の世界選手権が神戸であったり、デフリンピックが２０２５年にあったり、２０２６年には愛知名古屋でアジアパラがあるわけですから、何を今から取り組んで、その後どうなのかが重要なはずです。終わってから取ってつけたようにやっても駄目なので、そこを継続させていく中長期のビジョンを共有化できる仲間づくりが重要だと思います。
田中　東京パラリンピックで大きな一歩を踏み出した実感はあっても、当然まだ道半ばです。モニカさんの江東区の「心の授業」でインスパイアされた子供たちは今１２歳ぐらいですか。
瀬立　１５歳ですね。
田中　今１５歳ぐらいだから、２０年たって３５歳、３０年たって４５歳。彼らがこれからの日本社会をつくっていくのだなと思います。パラアスリートは生きる教科書となって、子供たちに背中を見せていってほしいと思います。いよいよ来年、パリのパラリンピックですが、そこで子供たちに何を見せたいですか。
瀬立　パリのパラリンピックでは、出場するからには一番高いところを狙っていくのがアスリートの使命だと思います。そこに向かって一生懸命頑張る姿からは、きっと何かを感じ取ってもらえると思いますので、それを見せていけたらいいと思います。
田中　河合さん、河合さんはＪＰＳＡ（公益財団法人日本パラスポーツ協会）、ＪＰＣ（日本パラリンピック委員会）の要職に就いておられる立場で、日本社会のよりよい姿のためにどんな取り組みをしようと思っていますか。
河合　モニカさんがおっしゃっていたように、アスリートにこそ発信力があるわけですから、アスリートたちに何を発信すべきかをしっかりとインプットしていかなければいけないんだろうなと思います。次世代のアスリートも含めて、継続的かつ計画的なアスリート教育は必要ですし、情報や学ぶ場の提供もしなければいけないですね。東京は障がいのある

方々の存在やパラアスリートの魅力というのを知ってもらう「ｋｎｏｗｉｎｇ」の段階でしたが、社会をこれからよりよくするために、自分たちが次には何ができるかという「ｄｏｉｎｇ」、この行動のアクションのところを再度皆さんと確認し、そんなことを意識もせずにできる「ｂｅｉｎｇ」、ありのままの、当たり前の状態にする社会を目指して、皆さんとパートナーシップをもっと築いていきたいと思っています。

田中　すばらしい締めの言葉、ありがとうございます。冒頭、稲垣さんから３つのミッションの話がありました。その中に、社会課題の解決につながるスポーツの社会的価値の創出というのがありましたが、これこそパラスポーツが果たせるミッションだと認識しています。江東区のお話のように、地域活動を通じて、それから子供たちをインスパイアして社会を変えていくのは、そこにパラスポーツという共生社会づくりの希望があるのではないかと思っています。御来場の皆さん、未来社会づくりに我々パラスポーツあるいはパラアスリートを利用していただいて、一緒に社会づくりをやらせていただきたいと思います。そのような決意表明をさせていただいて、終わりとしたいと思います。